

「レジスタンス中間経歴論集」(同大法学研究会編・一九八一年)

■ 年表 —

1975年

2・6

「全学闘」政治集会
(同大学館ホール)
主催・同大全学闘/
滋賀大経済学
部自治会

1976年

2・5

「全学闘」全関西総決
起集会
(同大学館ホール)
主催・同大全学闘/
関大連合戦線

6・7

「全学闘」が大成寮入

「放送局調整卓・学術団論集No.5」補助金問題に端を発する、学友団(学術団・文連・放送局・新聞局・基団連・体育会・応援団)十部外連による(対当局闘争)として開始された(74闘争)。「全学闘」はこの闘いを「第一期学費闘争」とし、「自然発生性に拝跪したが故に敗北した」と総括。そこから「党派闘争」「目的意識性の付与」という路線を展開し、自らを「プロ独派」と規定した。
本集会の基調には(74闘争)における彼らの位置があますところなく示されている。(資料No.1参照。あまり知られていないため、長文ではあるが全文掲載した。)

(資料No.2参照。)

大成寮の自主入寮選考活動中、「全学闘」が武装襲撃。「全学闘」敗

12・14

全学総決起集会
主催・学術団/新聞局
放送局(M前)

寮情宣に武装介入
(明徳館前・
通称M前)

北。権力の不当介入により、大成寮2名、「全学闘」3名が不当逮捕される。しかし、「全学闘」3名のうち2名が権力に「投降」。さらに、3名以上が警察権力の「事情聴取(任意出頭)」に応じたことにより、大成寮K君が「暴行」「凶準」で「起訴」のうえ、さらに「傷害罪」で「追起訴」された。

前述の「6・7」が(74闘争)以降の同大学生運動を決定的な「混乱と停滞」に引きずり込



▶12・14全学総決起集会

1977年

2月

5・18

5・19

5・26

6・14
17

6・23

入試情宣

新歓サークル員総会

全学々生大会
(同大学館ホール)
流会后、全同大集会
(M前)

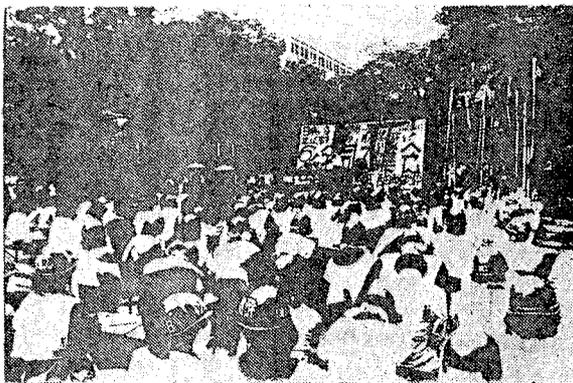
全同大集会 (M前)

自治会選挙

全同大集会 (M前)

一名不当逮捕、一名重傷 (P・B・団3単産闘争委員会)。学友会中
常委 (当時「全学闘」) が中常委名のままヘルメットで登場。学友会
運動総体を指導する部分としての責任性が問われた。

「5・19」。事実関係は、気負い
はあるが (正確) に記されている
同志社学生新聞第463号'77年5
月10日・25日合併号 (註1・年表
のうしろに掲載) を。そして、い
くつかの (引用 (註234)) を
 (解説) のための (註) とする。
(資料 No. 4・No. 5 参照。)



6・23 全同大集会

む中、それまで「全学
闘」により沈黙 (武力
恫喝) を余儀なくされ
てきた学内諸戦線が「混
迷と停滞」を打ち破る
べく決起。新聞局闘争
委員会 (P 闘委)、放
送局闘争委員会 (B 闘
委)、学術団闘争委員
会 (準) が集会を前に
して相次いで結成され、
「打ち続く反動の嵐」
教育の帝国主義的再編
に抗し、田辺町移転阻
止の戦列強化を克ち取るべく、同大衆運動の強固なる陣型構築を
の統一スローガンの下、共同闘争の第一歩を踏み出していた。(当時
すでに「全学闘」は「田辺闘争」をスローガンに掲げるのみで、事実
上闘争放棄をしていた。)

(資料 No. 3 参照。)



12・14 全学総決起集会後の学内デモ

6・29

刑法改「正」保安処分新設阻止、名古屋「公聴会」粉砕現地闘争

学生会館別館不当ガサ入れ

全同大集会 (M前)

刑法改「正」公開ゼミナール

(法自主権)

「10・8」10周年記念集会
(M前・同大↓円山公園デモ)

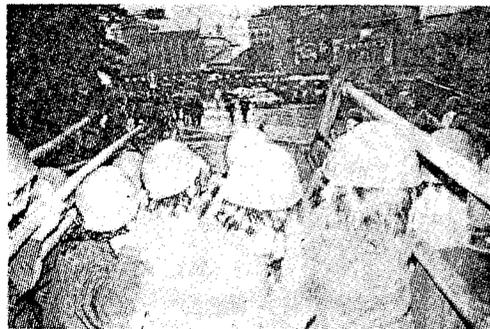
全学々生大会

6・29

午前7時、別館2F、6Fの自治会BOX・サークルBOXに機動隊が乱入。しらみつぶしに全館ガサ入れ。

一名不当逮捕。経済学部自治会不参加の意味は大きい。(評価すべきという点で。)

田辺移転阻止、刑法改「正」粉砕、72時



10・8 紙園石段下

10・19

全学バリケードストライキ

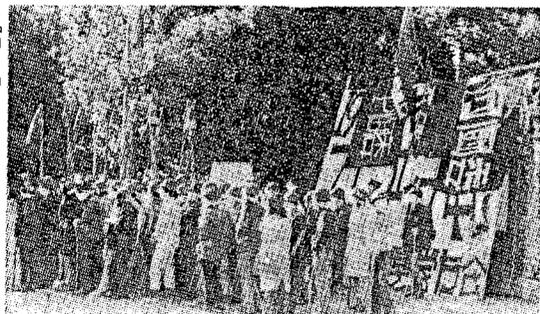
同志3名不当逮捕糾弾当局——権力——日共一体となったバリケード破壊攻撃、不当捜索糾弾集会 (M前)

間バリスト決議。

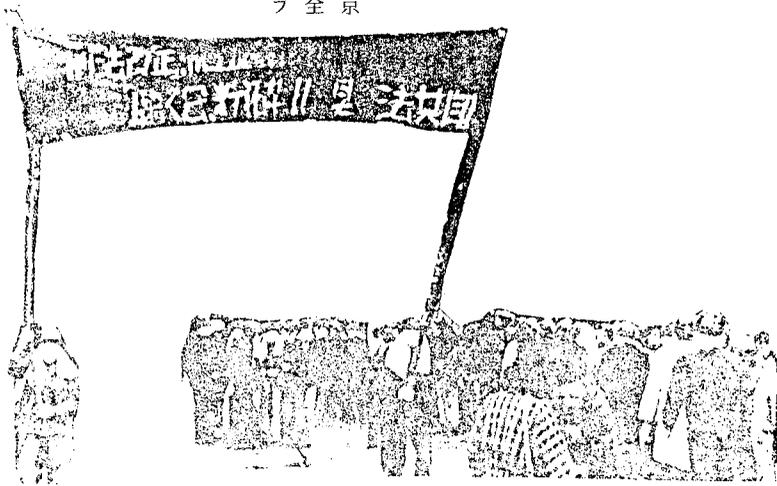
10月20日代々木約150名バリケード破壊攻撃。反撃の部隊3名不当逮捕。10月21日別館ガサ入れ。機動隊約100名学内乱入。

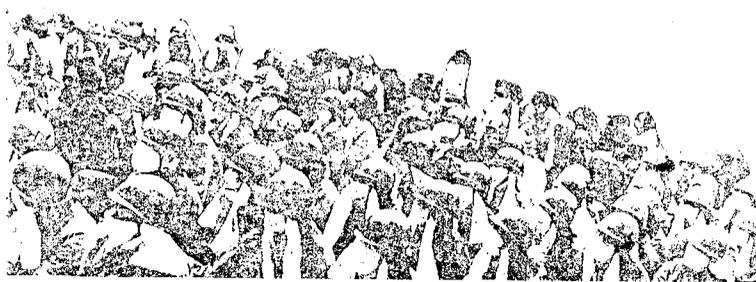


10・18 全学々生大会後キャンパスに結集した約150名の部隊。(PM七・〇〇)



10・20

<p>1978年</p> <p>1・10</p> <p>1・13</p> <p>1・25</p> <p>1月下旬</p> <p>2・2</p>	<p>対経済学部長榎原、大衆団交（M前）</p> <p>1・10</p> <p>全学総決起集会</p> <p>1・13</p> <p>大衆団交</p> <p>1・25</p> <p>「二期制」導入白紙撤回</p> <p>2・2</p> <p>刑法改「正」粉砕全関西学生実行委結成交流集会（同大学生会館ホール）</p>	<p>同大法共闘／阪大刑事研／京大刑法「改正」阻止共闘／全日法ゼミ関西ブロック。オプザバー参加・同大「障」解研／関学「障」解研 （資料No.6参照。）</p>  <p>刑法改「正」広島「公聴会」粉砕現闘部隊</p>
---	--	---

<p>10・27</p> <p>11・2</p> <p>11・14</p> <p>11・15</p> <p>11・25</p> <p>12月</p>	<p>対学長松山、総務部長渡辺、大衆団交（M前）</p> <p>10・27</p> <p>対学長松山大衆団交（M前）</p> <p>11・2</p> <p>刑法改「正」II保安処分新設阻止、広島「公聴会」粉砕前段階全国総決起集会（M前）</p> <p>11・14</p> <p>刑法改「正」、広島「公聴会」粉砕現地闘争</p> <p>11・15</p> <p>刑法改「正」、高松「公聴会」粉砕現地闘争</p> <p>11・25</p> <p>経済学部「二期制」導入策動発覚</p> <p>12月</p>	<p>のべ約6千名の学友が結集。</p> <p>松山逃亡。</p> <p>東北・関東・愛知・九州の各学生戦線約600名。</p> <p>現闘部隊約200名</p>  <p>11・14刑法改「正」広島「公聴会」粉砕前段階全国総決起集会</p>
--	---	---

2・9～18	入試情報 新人生歓迎集会	2名不当逮捕、1名重傷。
4・18	入学歓迎集会	
5・15	全学々生大会	学友団四単産よりパンフ「全世界獲得のために」発行される。学友会諸運動に対し暗黙の挑戦状、〈政治―文化〉二元論批判の再確認を意味した。(バリ内で、シンポ、映画、コンサート、研究会などを波状的に開催)以降、スケジュール・バリケードは安易に構築できにくい状況を創出した。
5・16～19	100時間全学バリケード ストライキ	
6月中旬	自治会選挙 全同大集会 (M前)	(資料「XXXに関して」No.1・No.2・同大法共闘内部討議レジュメ及び資料No.7参照)
7・7	刑法改「正」粉砕全同大集会 主催・法自／法共闘	10・13以降、連続封鎖闘争(有終館、各学部事務室)。三項目要求署名活動(署名活動に関して法自・法共闘不参加)。
10・13	田辺町移転粉砕全学総決起集会	

11・17	対学長松山大衆団交	<p>機関紙ズイツァツイオン発行。重要な資料であるが、いずれC共闘(当時)を担った諸君の手によって明らかにされると思うので、あえて掲載しない。(法自・法共闘不参加)</p> <p>法共闘レジスタンスVol.1発行。 この間、法共闘教室占拠闘争を展開。 団交決議。逃亡の場合時限バリスト決議。 松山逃亡。</p>
12・14	C共闘(サークル共闘会議)総決起集会	
12・20	全学討論集会	
1979年	団交要求全同大集会 (開発申請をめぐって)	
1・10	中央委員会	
1・12	対学長松山大衆団交	
1・16～17	全学バリケードストライキ	



▶ 1・13 対学長松山大衆団交

1・18

東大闘争10周年全国学生集会(安田講堂前)

1・20
1・22

試験全面粉砕ピケ封鎖

「学友会中常委はそれ自身、独自の運動展開をなす」とし、本集会に中常委主催参加。
対学長松山大衆団交要求↓松山逃亡。学友団(学術団本部・文連本部・新聞局・放送局)十部外連が、パンフ「後期試験粉砕闘争」の渦中から、飛躍への道標を獲取せよ(討議資料)を発行。重要な資料であるが、当時サークル運動を先進的に担っていた諸君の手によって、いづれ明らかにされると思うのであえて掲載しない。

(学内掲示)

1・23

当局4回生レポート
切換え発表

2・9
13

入試情宣



▶ 2月入試情宣

2・10

当局レポート全面切換え発表

2月中旬

サークル員総会
(同大学館ホール)

2・17

全学々生大会
(同大学館ホール)

3月

3・19

「同大学生有志」を名乗る部分此春寮武装襲撃、不当占拠

(商業新聞紙上)

法共闘レジスタンスVol 2 発行。
法共闘特別アビール。

法共闘レジスタンスVol 3 発行。

「同大学生有志」に名をかりた部分が「此春寮解放」と称し、此春寮に武装襲撃。しかし、此春寮生の決起により「同大学生有志」は放逐された。

'75年に「全学闘」が大成寮に対して「全学闘」の政治内容を認めるか否か、担うか否かと、寮委員会、並びに寮生に対し武力桐喝をかけた寮自治を認めないとする方針を打ち出し、学友会が直接寮管理を行うとした。(しかし、翌年2月、大成寮生の決起により「全学闘」一派は



◀ 2月入試情宣



▶2月入試情宣

寮内から放逐された。

このこととどう違うのか。「5・19」はここで完全に踏みこじられた。「彼らも同じことをしたではないか」という論理はど恐ろしいものはない。

そしてまた、学友会中常委(当時)も、後の代表者会議で「同大生有志」を支持したと聞く。しかし何よりも、〈私達〉の批判ができていなかったことを〈問題〉にすべきである。(学内各単産の中では、同学新477号1979年5月19日号の「全学闘」に言及した論文に、「今回の同大生運動有志(ママ)諸君による此春寮襲撃事件は、何ら全学闘問題の解決になりえない」という記述がみられる程度。)

現在、五寮会議内で議題にされているらしいが、やはりいづれ問題とすべき点を多く抱えている。とりわけ「全学闘」との思想的対峙性が、低レベルのゲバルトレベルでなされたことは残念でならないが、これが彼らの現状だと思えばうなずける「事件」である。『季節』の人達もこのことに触れているが、かつての革命拠点——此春寮を同大生運動の金字塔をうちたてたものとしてもちあげるのは、いまだけない。時間的空間的なギャップは、政治思想的判断力をも鈍らせるのであろう。

〈年表註〉

77年5月10日・25日合併号 同志社学生新聞第463号からの〈註〉

5月19日、この日を我々は、はっきりと記憶しなければならぬだろう。同大生運動は「混沌と停滞」の状況をこの日を境に突破し、新たな飛躍、発展へと進撃を開始したのだ。

全学々生大会にむけて、我々学友団に結集した各単産本部(学術団本部、文化団体連盟本部、放送局、基団連本部、新聞局)は、サークル運動の立場性より学友会中央との会議をもつてきた。その中で我々学友団(十部外連と言いたいところだが、今現在彼らの立場性はいまいであり特筆を避ける)は四項目にわたる質問状を学友会中央に対してつきつけ、それに対する明確な回答が得られない場合、学生大会への協力を拒否するとした。その四項目とは、75〜76年の学友会中央の行った行動に対するものであり、①75年当時における学友会中央並びに全学闘のサークル、寮に対する介入、武力恫喝に対する自己批判的総括②入試情宣、入学式情宣に於いて学友会中央が自らの責任性を放棄した事に対する自己批判的総括③75年、学術団を中央委員会の統制下に置くとした中央決議に対する自己批判的撤回、④学友会中央は大成寮と75〜76年の問題に対し話し合い、何らかの決着をつけること——以上の四項目に対し学友会中央が明確な回答を示さない限り、学友団は各単産サークル員に対し全学々生大会への参加ないし協力を要請する事はできないとした。

それは75年当時、とりわけ9・30天皇訪米阻止行動以降、学友会中央、全学闘が取ってきたサークル運動の個性性、独自性を無視した形での介入、恫喝、そして大成寮に対する寮自治破壊を意図する武力恫

喝といった事実を背景としたものである。そして、また学友会中央は入試情宣前、我々が入試情宣に対する話し合いを要請したにもかかわらず「政治内容の話し合いが先決だ」とし、結果的には入試情宣中の様々な「事件」に対し彼ら学友会中央は何らの対応を取ることもできず、反権力の立場性すら放棄したのである。(とりわけロックアウト下における警官3名学内立入りに対し彼らは「たいした事じゃないと思っただ」とまで反動性を明らかにした)それにもかかわらず、つまり、それ程迄に政治内容優先の立場性をとってきた学友会中央は、この期におよんで我々学友団に対し、政治内容の問題はあともわしにして、全学々生大会はぜひとも開かねばならない。学友団の諸君の協力を要請する。そして、統一行動をとってゆく中から相互の不信感も解決する、とまで言ってきたのだ。その「不信感」こそは、言うまでもなく彼ら、学友会中央——全学闘が生み出したものに他ならない。

話は74年学費闘争へとさかのぼる。確かに74年学費闘争に於いて今出川キャンパスを埋めつくした二千名もの学友は同大当局のレポート試験切り換え、ロックアウト措置の前に後退を余儀なくされた。しかしながら、その「後退」の影に当時の全学闘が国家権力——機動隊との対峙戦から逃亡した事実はまだ知られていないことである。74年学費闘争を最も戦闘的に闘ったのはサークルと寮の部分だったのである。

対峙戦から逃亡し組織温存を計った学友会中央——全学闘は、学費闘争敗北が顕在化してわずか数日後、2・6政治集会と銘打ち、学費闘争の敗北を「自然発生性に拜跪したからだ」と規定し、一面的に「目的意識性」を対置するといった曲芸をなしてきた。(闘わずして何が総括だ!)それ以降、彼らの学内大衆戦線に対するやり口は、決定づ

けられたと云つていい。

以降、彼らは語ってきた。「経済主義、精算主義との分岐を鮮明にし、その潮流との党派闘争を担うのか否か?」「経済主義の泥沼にはまりこみ『改良の果実』をもつて事足りれりとする改良主義者との党派闘争を担うのか否か?」「大陸革命派を分散させている中国共産党との党派闘争を担うのか否か?」

そして彼らは、この珍妙なレッテル貼りのもと、サークル、寮に対して囂を繰り返して学内大衆運動の解体を促す働きをなしてきたのである。(74年学費の総括が出せないならこれに従え、という論法で)それは75年の、9・30以降明確な形となつてあらわれてくる。それはまさしく、彼らが「混迷と停滞」「政治アパシー化した大衆」の何たるか、何が起因したかを理解し得なかつた事を物語るであろう。プロ独派を自称してきた彼らは「60年代後半の革命的左翼の敗北がつきつた権力問題を精算することなく……(略)……権力問題を対象化し、分散する大陸革命派を統合する基準を提出し、世界プロ独へ突き進め」とした。そして彼らは権力問題を対象化したか?大陸革命派を統合する基準を提出したか?世界プロ独へ突き進んだか?否、否、否である。彼らがなした事は、レーニンの教条の部分的摘取とつき合わせ、そして、反動的な学内諸戦線の分断だけである。その空虚なスローガン主義と大衆運動破壊は「革命」の何たるか、その初歩的な原則——誰が革命主体なのかを欠落させたものでしかなかつた。「外部注入」の名のもとにおける寮自治の破壊、サークル運動の引き回しの破壊は学内大衆の政治アパシー化、「混迷と停滞」を逆に促進するものとなつたのである。

75年10・31狭山をめぐる放送局に対する囂はそのことを明確に示

機動隊の学生会館導入が、かなりの確率で予想された。同大当局にとつてみれば、この時程、上智・青山方式——学生自治破壊、筑波式管理抑圧体制へ持ち込む絶好の機会はなかつたといえる。そういつた危険を犯してまでこの時期に(内部結着がつかず混乱が予想される時)学生大会を開く必要はどこにあつたのか?我々、学友団の延期要請の根拠はここにあつたといえるし、同時に学友会中央の意図としては自らの延命をかけた起死回生の一発であり、学内大衆戦線のなしくずしの統合(むりだよ)にあつたと考えられる。

そして5月19日、全学学生大会は強行された。我々、学友団、そして大成寮は決起した。全学学生大会(以下学大と略す)に於て、我々はわずかのベテンをも許さず、彼ら学友会中央の反動性を明らかにすることを確認した我々は、学大開会宣言後、定足数の確認に於て明るみになつた彼らのベテンを追求した。

即ち、学友会中央のベテン、学大にあたりかなりの委任状集めを行った事実、そして学大参加者の中にも数多くの委任状署名者がいたにもかかわらず、我々の主張——議案書の否決、彼らに対する責任性の追求を恐れ、委任状総数をゼロと発表し、流会を宣言するといった事に対し追求したのである。彼ら学友会中央は、その事に対し何ら明らかな答弁もなし得ず、自ら同大の全ての学友に対する裏切りを証明する事となつた。

学友団、大成寮を中心とした学大参加者の怒りは爆発し、学大の全同大集会への切替え、学友会中央の放逐が圧倒的な学友の支持のもと決定された。発覚したベテンにも居直り、姑息な居すわりを続ける学友会中央に対し「学友会中央放逐」のシュプレヒコールは容赦なく打ち続いた。

している。当時の学友会中央——全学闘は10・31狭山闘争へ決起しようとした放送局に対し「改良主義」の名のもとに囂をかけ、狭山闘争への反動的阻害物たる事を自ら明らかにした。また、その当時大成寮に対しては、全学闘が提起した政治内容を認めるか否か、担うか否かといったところで寮委員会、並びに寮生に対し武力囂をかけ寮自治を認めないといった反動的方針を打ち出し、学友会が直接寮管理を行なうとした。(しかしながら、その翌年2月、寮生の決起により全学闘一派は寮から放逐されたのである)さらには(あげつらえばきりが無いが、この事を抜きにしては彼らの反動性は語りきれない)76年6月7日、大成寮の諸君が自主入寮選考の情宣中、全学闘が武装襲撃をかけ(結果的に敗北し)全学闘のメンバー三名が逮捕され破廉恥にも権力に投降するといった、まさに同大学生運動史上、かつてない反動性を露骨に示していった。投降者は、一切合切を権力にゲロし、大成寮のメンバーはもとより、サークル運動を主体的実践的に担うメンバー、その内容を全て権力の前に明らかにしていったのだ。(なんたる破廉恥ノ事情聴取に応じた彼らのメンバーの証言で大成寮のメンバー一名は追起訴されたのだ。)

話をもとにもどそう。以上の様な学友会中央——全学闘の路線の一貫性を主張する学友会中央との話し合いは結局、我々の提出した四項目に対する明確な解答が得られないまま、即ち我々学友団の支持を得ないうちに、学友会中央は全学々生大会強行を打ち出した。(前日に於て我々は学大の延期を要請した。これは我々にとって可能な限りの護歩であつた)

全学々生大会は、当初より、かなりの混乱が予想された。そしてその混乱は、同大当局——権力の一体化した攻撃、わかり易くいえば、怒る学友、飛ぶ怒号。怒りは頂点に達した。75年2・6政治集会以降、弾圧され続けた、サークル員、寮生の怒りは、ここに爆発したのだ。

演壇において繰り返される学友会中央の空虚な政治内容は彼らの「実践」が呼び起こした怒号の前にかき消されていった。そして彼らに対し決定的となつたのはⅡ部学友会からの破産宣告であつた。「学友会中央はⅡ部廃校を田辺町移転への布石としてしか考えていない」まさしく学友会のアライバイ的田辺移転阻止闘争、Ⅱ部廃校、廃寮化攻撃粉砕の闘いが、いかなるものであつたかを明らかにした。彼ら学友会中央は遂に破産した。彼らは闘う気など毛頭なかつたのだ。

学館ホールでの全同大集会は全ての学友に対し「学友会中央放逐」の決定と、我々の手による6月自治会選勝利への決意を報告する為、今出川キャンパスへ場所を移すことになつた。

学友団に結集した各本部、大成寮、P闘委、B闘委、団闘委(準)三闘委そしてⅡ部学友会各単座からのアピールは三〇〇名を上まわる学友に滞りなく響きわたつた。学友会中央の放逐、学友会・学友団運動の再建、6月自治会選勝利、田辺町移転実力阻止、Ⅱ部廃校、廃寮化攻撃粉砕の闘いに向け同大学生運動の陣型は強固に打ち固められた。まさしく学内大衆戦線結集の時は来た。我々は、さらに学内諸戦線に呼びかけよう。社会学会、哲学学会、教育学会……同大学生運動の爆発的昂揚を準備する時は来た!

大胆なれ。大胆なれ。更に大胆なれ。ルビコンは、すでに渡られた。残されたものは前進だ。ここがロードスだ。ここで飛べ。

〔注〕5月20日中央委員会決議により学友会は新体制として発足し

「六十二年学生運動の現状は、われわれをも含めて、如何なる政治潮流も、学生運動の豊かなヴァイタリティを解放し、組織し、階級的発言をなす実践的媒体として機能させることに成功していない。この現状は、政暴法闘争が証明したわが国プロレタリア政治と組織の完全な破産の認識と交錯する時、階級的発言をなす思想的・実践的媒体としての学生運動の再建と創造は、われわれの緊急課題として存在する。この緊急課題へのアプローチが、わが国プロレタリア政治と組織の破産を根拠づけるアブオリナ前衛主義から解放されることなくして実現しないものである以上、かかる前衛主義の学生運動への導入による、学生運動の死への誘いを誘発する一切の存在に対して、絶えざる弾効を展開し、自らに課した右の任務を実現しなければならぬ。」

〈年表註3〉

「死せる学生運動の現状から。」

上 玲子

（社学同東京都事務局員）

（中央大学昼間部自治会ニュース No. 3・1961年11月24日）より

「一切の過去の歴史に対する弾ガイ、過去の現在に対する弾ガイが行なわれ、権威主義に対する批判は世界同時的な現象となろうとしている。権力者権威主義者達はおも一層自らの権威を聖なるものへと高めるために心血をそそぐ。スターリンはこび出され祭壇にはレ-

ニンの死体が独裁的に君臨する。

私達の現在にはスターリニズムの代りにレーニン権威主義が代置し、またはマルクス主義の復活をと覚えても少しも改善されない。イズム化されたものはすでに本来の姿を失ってしまったにもかかわらず、ただ権力者達だけが私達とは異った見方をし、現実から大衆の眼を欺き、そらそうとするのである。ロシアの民衆の間にスターリンに対する幻想が未だに生きていいることがあるとすれば、これは「革命」の必要がこのような意識構造の中に実証的に存在しているということなのであり、権力者の行動はこのような「必要性」の現実に対して彼らの政治支配を「スターリン権威主義」からそれ以上の「レーニン権威主義」へと時間を逆にたどることによって大衆に對置することである。だから、ロシアの官僚達が五四メガトンの技術で大衆をおどしつける傍ら、過去の革命を引き合いに出すのは幻想による政治支配を強化するために外ならない。もしも、私達が過去の革命精神を復活させることが出来るとしたら私達自身が革命的激動のまっただ中に生きているという前提をぬきには出来ないであろう。しかしながら現在のよう「前衛主義者」自らが大衆に対して「無関心」の烙印をおしつける時期、現在からの脱却、現状への破壊、未来への発展のエネルギーが大家自身の政治、自然発生的成長、彼女達の創意の中に見出されぬようなときに、もしも一七年革命の「精神」を押しつけようとするのならば、それはすでに一七年精神を現状維持的な「精神」に改革してしまう事に外ならず、現状をさらに固定化するものに外ならない。自らの弱点を外にある権威によって補完しようとする空しい努力！これが前衛主義者達の姿であり、権威主義は権威主義を生み出さざるを得ない。

〈年表註4〉

「テーゼ 一九六一」

上 玲子

「この人達はたしかにある種の信仰に燃えていて、事実、恋をしている男のように崇高に見える時もある。しかし、このような人達が学生運動に関係しはじめるやいなや、学生運動はいつの間にか「プロレタリア」の「労働者の構造改革」とか、結局は学生ではない労働者に「ジーザー」のものは「ジーザーに返せ」といった調子で、学生運動の問題の解決を、労働者の運動の中に安易に解消してしまうのである。「学生運動の低迷は客観的には現在の労働運動の沈滞にある」などと彼らは、だから、たかをくくって見ていることを当然のように考えるのである。私たちの考えなければならぬ問題はそのような他方本願的解決の可能な問題ではなく、学生運動そのものの問題であるはずだ。

そしてこのように考えてきて、私たちは、レーニン主義的な国家、プロレタリア独裁をも否定しうる論理なくしては、現在のICBMの時代、「不可触兵器」の現代における革命はありえないし、類的人間への途上における最後の障壁である「国境線」をとりはらうことは不可能であるように思う。

そのためには、すべての人間が、自己権力にめざめ、主張することが必要であり、今や、学生にとつては、「プロレタリア独裁を先ず、」などという段階的思考をふりまわすのではなく、はつきりと「学生独裁」を掲げるべきであり、おかみさんたちは「おかみさん独裁」を、運転手たちは「運転手独裁」を掲げて前進すべきなのである。主権者意識に貫ぬかれていた主体性なしには私たちの運動はなく、インテリゲンチヤの自立した運動はないであろう。」

「……私達は一体何に対して絶望するのかと、私たちは又しても繰り返さなければならぬ。進行しつつある俗っぽいニヒリズムの風潮がもしも現在の大衆運動の低迷から現在の大衆は無関心であるという私達の身勝手な解釈によって正当化されうると考え、それをよいこととして私たちが自身の絶望を無気力と同じものだと考へるとしたらそれこそ見当はずれであり、他人を大衆よばわりして、自分をそうでない何ものかのようにならせるとしたら、そのような人達はもはやどのような絶望ともキツパリ縁を切ってしまうべきなのだ。だから、もう一度強調しておく。前衛面や指導者面などはしてくれな！私たちが日本革命運動始まって以来はじめてみたものはそのような意識の崩壊であったのだ。あなた方が大げさに絶望などという私達はゾツとする。勝手にいたまえ、その度に私達は口ぶえをならすから。私たちは口ぶえならすから。」

私たちの経験した革命的な運動があなた方の掲げている公式や綱領にどうしてもあてはまらないのであなた方は絶望する。当り前だ。実際のところ私たちは運動が自然成長をとげ、組織化される瞬間になつて、あなた方の革命のたわごとを、聞いていられなくなつて、遂にあなた方の革命理論のうつつからどんどんこぼれ出してしまったのだから。あなた方は戦いのずつととうしろの方で城を築きにかかったのだ。なんとという遠大な計画だろう。反帝・反スタの党だつて？ なんと長々しい過渡期だろう！ 構改のプロレタリア独裁だつて？

私たちの絶望は正しく、あなた方のように現実からではなく公式から出発し、公式によって大衆を抱擁しようといまだに信じきつており、

自然発生性に拝跪することをおそれるだけで自然発生性におじけづいて逃げてしまふような前衛主義者に対してなのだ。——自然発生性に拝跪するというレーニンの用語は、元々学生運動には適用出来ない概念であることに注意せよ——

自らの破産を何か外にある権威をもち出すことによつてどうか陰蔽しようとする権威主義に対して私たちは絶望するのだ。

スターリンの代わりに今度はレーニンだ。

権威者たちは五四メガトンの水爆で大衆の口をふさぎ手足を縛つてゐる。そのような時に反帝・反スタの同盟から今度は党を作ろうだつて、党がありさえすれば何ごとかが起こせるとは何とあどけない考えだろう。

権威が別の権威によつてしか自らをたもちえず、結局くずればはじめ、党がますますたわいなものとなりはじめた現在の頹廢の状況の全過程は革命が革命されることである……」

「……彼らもまた前衛主義者なのだ」という社学同に対する大衆の告発、大衆運動の現在の自覚は、私達に旧社学同の一切の残滓から訣別することを要求している。

これらの声は、国家的体制の様を打ち破つた大衆によつて、国家的状況を呈している現在の諸前衛に対する、権力放棄のすすめであり解党的批判である。そして私たちも解党主義の一変種にちがいないであろうが、ただ今までの解党主義者たちが、与えられた党から逃げ出す口実にそれを用いたのに反して、私たちは、党を外から破壊するためそれを使用する。私達が最後の国家を破壊し、国境を撤廃する行為を、二段階的なプロレタリア独裁などによつてはすでに時代おくれであるという現在にあつては、国家に対して適用されうるものでなければ

ばならない。……」

「……このような、やつと始まつたばかりの私たちの破壊行為に対して保守主義者達は反マルクス主義だとか、反レーニンの傾向だとか、頑固派プチブルとかと、彼らの考えつく最高の不道徳用語をならべたててであるが、それらは、半分は確かに當つてはいるが、あとの半分は絶対に當つていない。現実の運動と関係のあるのはこの残りの絶対的な半分の方なのであつて、つまり、前衛主義者たちのカビの生えた公式にはどうしてもあてはまらなくて脱落した、つまり、余剰として私たちの手元に残された部分である。……」

★

〈SECT・6〉を勝手に〈引用〉したばかりか、ぶつぎりにしてしまつた。ご容赦いただきたい。未見の読者は、できるだけ全文にあつてほしいものである。

上玲子氏は、「テーゼ 一九六一」の文中で、「……二年後か、四年後か、それとも十年後か、この現在の解体と混沌、分裂と頹廢に終止符がうたれるためにはそれ以上の時間が必要とされるかもしれない。十五年後か？ そのとき私は三六か七くらいになるはずのだが、ともかくそのようなときはくるであろう。來たるべき彼らの時代をうたいあげたブルジョア支配者たちの死の時間はこのようにして近づいてくる。……」と語つておられる。今、すでに二十年の月日が流れた。そして、ここで述べられている課題は、同じく私たちのものとしてありつづけている。

★以上の年表はひとつの目安にすぎない。集会とかデモの形をとらない（とりえない）〈闘い〉が同時代に個々の〈作業〉としてあつたらうからである。